

OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾントクラブ第33号(2012年3月)



巻頭言

ゾンタ・ローズデーによせて

会長 河村 さと子



年も改まり、春に向けてのゾントクラブの活動が始まりました。

去年の国際ゾンタ 26 地区第 11 回大会で 2012 年 3 月 8 日 (木) のゾンタ・ローズデーを各クラブ一斉に祝うことが決議されました。

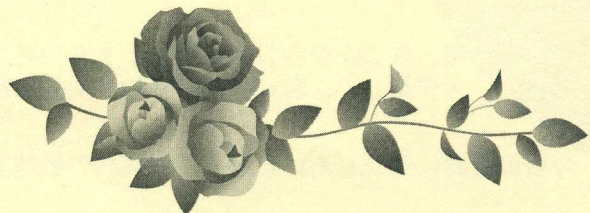
それを受けて、大阪Ⅱゾントクラブでは、同日 18:00 より例会場でもあるリーガ・ロイヤルホテル アネックス「ベラコスタ」を借り切り、第 18 回チャリティ・イベント「日本の神話朗読とギターによるスペシャル・チャリティ」の夕べを開催することになりました。

朗読は、当クラブ会員 荻野恵美子氏が担当され、女性の力が国の源であった古代時代日本の神話をファンタジックに紹介して下さる予定です。

本年も大阪Ⅱゾントクラブが温かい皆様の集いの場になることを願ってやみません。



誕生月の会員に黄色いバラのプレゼント



全体報告

河村 さと子



国際ゾンタ 26 地区第 11 回大会が開催されました。

開催日：2011 年 10 月 13 日(木)～15 日(土)

会場：ホテル日航奈良・なら 100 年会館

開催ホストクラブ：奈良ゾンタクラブ
奈良万葉ゾンタクラブ

地区大会委員：カバナー 上田トクエ
ホストクラブ会長 清岡恵美子
大会委員長 松本真理子

大会テーマ 「歩んできた道、これからの道」— ゾンタドリームの実現に向けて —

第 11 回 26 地区大会は、次期国際会長リン・マッケンジーさんを国際代表として迎え、全国から 335 人（出席率 36%）のゾンシャンの参加により、日本ゾンタの誕生 50 周年を祝うとともに、ゾンタの次の夢の実現に向けて、日本ゾンタの今までの歩みと未来を探りました。

地区大会で審議され、全会一致で決議されたことは、次の項目です。

1. 2012～2014 年度の地区予算
2. 2012 年 3 月 8 日の「国際ゾンタ・ローズデー」を各クラブ一斉に祝う
3. 2012 年 3 月 17 日開催予定の内閣府男女共同参画局との共催事業をゾンタ 26 地区全体の事業として位置付ける
4. エリアミーティングの任務で、講演、講師を務める 26 地区各委員長の登録費はエリアミーティングの会計より搬出する

また、2011 年東北大地震におけるゾンタクラブ全体の支援内容が報告されました。2012～2014 年度新ガバナーは岡山ゾンタクラブの三宅定子さんに決定しました。その他の新役員については、エリア報告を参照ください。

国際ゾンタ26地区 第11回地区大会



地区大会大会場にて

ビジネスセッション

西村 博子



ガバナーによる大会委員任命の発表の後、議事が進められました。登録委員会の報告で、出席者は、地区役員、ゲストを入れて 335 名、内デリゲートは 47 名でした。大会会議のルールが発表承認されたあと、プログラムの承認、前回地区大会議事録承認、ガバナー活動報告、副ガバナー、OMC 委員会報告が続き、有意義で良い活動をめざして会員増強の啓発が提唱されました。地区会計の報告が行われた後は、東日本大震災について、震災支援委員会委員長から感謝のもとに報告されました。国内外の多大なる支援金のもとに、山田町ゾンタハウスが設立され運営を続けられていることに、胸が熱くなりました。そして設立されたこの基金にご協力下さった国内外のゾンシャンに心からの感謝の意を表することが決議されました。

地区会計の議事では、地区会計の監査報告は税理士でなく、会計士が行うことがバイローズにもとづくという意見が、フロアからありました。コーヒープレイクのあとは、以下の議案が審議され議決されました。

- ① 2012 年 3 月 8 日の「国際ゾンタローズデー」を各クラブ一斉にお祝いする
 - ② 2012 年 3 月 17 日開催予定の内閣府男女共同参画局との共済事業を地区全体の事業と位置づける
- 地区予算案、地区委員長の経費増額についても協議されました。

【第2回ビジネスセッション】

国際会長ダイアン・カーチス様からのビデオ・メッセージを拝聴いたしました。世界大会で採択されています国際奉仕プロジェクトの支援続行と ZISVAW の新しいプロジェクトが採択されています。ゾンシャン誌を通じて、またウェブサイトで情報が公開されていますので私たちも大いにサイトを活用していきたいですね。

次期地区役員の選出に関しては、手続きどおり行われ、各候補の紹介のあと各候補者のスピーチを聞き、その後選挙でオルタネートとして投票いたしました。

【第3回ビジネスセッション】

前日の選挙結果の報告がされて、次期の新役員が紹介されました。その後、各 AD からの活動報告、また地区の各委員会報告がありました。今年度は 2 つのゴールデン Z クラブが誕生し、大変嬉しく、若い女性の今後の活動を期待してやみません。

多くのゾンシャンの皆さまと交流し、大いに学んだ地区大会、今後の活動に活かしたいと望み、次回への参加を楽しみにしています。有難うございました。

村木厚子氏の講演を聞いて



宮本 典子

笑顔の素敵なお村木さんでした。10月15日のワークショップは内閣府政策統括官村木厚子さんの講演でした。

『共生社会を考える』—子どもと男女共同参画の視点から

現在日本の直面している少子高齢化の問題について男女が共に支えあう社会作りを担う専門官としてデーターをもとに話されました。

急速な少子化の原因を考えると、まず、第2次ベビーブーマー（現在30代の終り頃）が子供を産んでいない、つまり20～30代の男女に結婚していない人が多く、また結婚した夫婦でも子供が少ない。これが将来の人口推計、2055年を推計した生涯未婚率23.6%、夫婦の出生児1.69人、合計特殊出生率1.26に反映している。一方、現在の国民の希望は、9割以上が結婚を望み、夫婦は2人以上の子供を欲しいという。この乖離は、結婚についての経済的基盤の欠如—適齢期男女の正規雇用者では6割が結婚しているのに非正規では2割である、年収300万以上の男性の多くが結婚しているが、それ以下では結婚できていない—に現れている。すなわち雇用の安定性、育児休業の有る無しが大きく関係している。さらに出産には子育てをしながら仕事が続けられるかどうか、第2子以降の出産意欲には夫婦の家事、育児の分担の度合いが関係している。これらから少子化問題は女性が安心して結婚し、働きながら子育てできる環境が必要で国もその対策をしなければならぬ。現在の日本の多くの問題は女性が希望する職業で働ける社会を作ることによって解決する。国家戦略として取り組めば日本はもっとよくなる。

ここまでは公式の話でしたが、皆様御存知の村木さんの事件、思い掛けない164日もの長い拘置を、どう乗り切られたか、拘置所生活とはどんなものかのお話は聞きものでした。

突然ふりかかってくる危機の中で人間性を保ち、どうにか切り抜けられたのは、すぐできることにはすぐとりかかる、取りかかれば動き出せば精神状態が落ち着く、そういう習慣が身を助けたと思う。そして取りあえず今日頑張ろう、一日が一生と思って生きていくとしたからだろうと云われました。ふりかかってくることは選ぶことはできないけれど、それをどう使うかは私達次第である。好きな本、アニメやミステリー等の本や好きな食べ物の差し入れで過ごした。毎日の取調べは本当に大変だったが、支えてくれたのは家族と仲間たちだった。

終って壇をおり、もう一度戻って花束を受け取られる村木さんの笑顔はとても素敵で、前向きに生きてこられた同胞女性に皆大きな拍手をおくりました。

写真と説明



ベトナム・ベンチェの障がいを持つ女子への10年間にわたる職業訓練支援と自立援助にたいし、当クラブが優秀奉仕事業部門の「地区アワード賞」を受賞しました。



ベンチェ職業支援先で作られた手刺繍の額、ポーチ、Tシャツをゾンタストアで販売し、人気を呼びました。



当クラブのハンドベル・ガールたちにより「エーデルワイス」「よるこびの歌」「上を向いて歩こう」の3曲が演奏され、パーティ会場を大いに盛り上げました。

わたしたちの成年後見制度

幡山 玲子



9月例会で弁護士久岡英樹氏による「わたしたちの成年後見制度」と題する卓話を伺った。

成年後見制度は、法定後見制度と任意後見制度からなる。法定後見制度とは、判断能力が低下して自分一人では財産を管理することができない人を保護し支援する人（代理人）を最初から公的な機関すなわち家庭裁判所が関与して決める制度である。判断能力の不十分さの能力に応じて、事理弁識能力を欠く常況にある場合を後見、事理弁識能力が著しく不十分な場合は保佐、事理弁識能力の不十分な場合は補助と3類型に別れ、それぞれ成年後見人、保佐人、補助人が家庭裁判所によって選ばれ、本人の利益のために法律行為を行ったり、法律行為に同意したり、取り消したりすることによって本人を保護していく制度である。任意後見制度とは、あらかじめ判断能力のある間に、将来判断能力が十分でなくなったときに日常生活や療養看護、財産管理について自らに代わって判断し法律行為を行ってくれる人（任意後見人）を自分で選んでおいて、委任する行為を契約書に定め、将来判断能力がなくなれば家庭裁判所に任意後見監督人の選任を申し立てて、監督人の就任が決まれば、任意後見人による後見が始まるという制度である。

このところ、自分が何をするために部屋から出てきたのかわからなくなることがあり、最初から自分の行動を思い起こして解決するということがしばしば起こるようになってきた。幸い今は家族がいるが、もし一人になればどうするのか、将来の不安を解消するために任意後見制度を利用するのか迷うところである。任意後見制度は、自分で将来を託せる人を選ぶことができるのはいいが、公的機関によるチェックが入るのが申し立て後であり、よほど信頼のおける人でないと財産を勝手に処分される恐れもある。また任意後見が始まるまでも、始まってからも月々の費用が発生し、その費用負担に耐えうるか否か、また何をしてもらうのか、死後の処理までお願いするのか、いろいろ問題は多い。

久岡氏の成年後見制度に関する卓話は2回目である。最初は2000年度の導入後間もない頃で、成年後見制度がどのようなものか概略を伺ったのであるが、その頃は親の世代の問題で、自分には関係の無い話だとあまり関心は持てなかった。前回から10年を経て再度お話を伺うことができ、自分にとって身近な問題として成年後見制度を考える良い機会となった。



9月卓話



11月卓話

ひょうごセルフヘルプ支援センターの歩み

芳川 た江子



2011年11月10日の例会では、「ひょうごセルフヘルプ支援センター」の代表の中田智恵海先生が、「ひょうごセルフヘルプ支援センターの歩み」についてお話してくださいました。

中田智恵海先生は、京都仏教大学社会福祉学科の教授で、ゾンシャンの牛田さんとは、10年前に共通の友人を通じてお知り合いになられたそうです。中田先生には、口唇口蓋裂をもった息子さん（現在41才）がおられ、生後2ヶ月から6回手術をされたそうですが、なかなかうまくいかなかったそうです。1977年から口唇口蓋裂の親の会が発足していて、中田先生はそこにお入りになり、2000年にひょうごセルフヘルプ支援センターを立ち上げられました。2010年に10周年を迎えられ、大阪Ⅱゾンタクラブのゾンシャンの有志数名が「創立10周年記念事業」に参加して、障がいをもったグループの方々とグループ討論や演奏を一緒にできたことは、大変貴重な体験でした。

ひょうごセルフヘルプ支援センターには、色々なセルフヘルプグループがあります。身体に病気が障がいのある人たち、難病・病気を抱える人たち、手術や事故の後遺症をもつ人たち、知的障がいをもつ人たち、精神障がいをもつ人たち、アルコール、薬物、摂食障がい、ギャンブル等の依存のある人たち、子どもや伴侶等を亡くした人、離婚した人たち、不登校や中退、出社拒否等の状況にある人たち、心の課題を抱える人たち、性の課題で悩む人たち、虐待してしまう人たち、虐待される（た）人たち、子育て中の親・家族のグループ、ひとり暮らし高齢者のグループ、脳卒中後遺症者のグループ、介護者家族のグループなどです。センターのめざすものは、この各々のセルフグループについて情報提供や支援をして、つないでいき、誰もが生きていきやすい地域社会を行政と協力して作ることです。障がい者の方々は守られる立場ではなく、積極的に社会に出ていけるよう危険をおかす自由というスローガンをかかげておられます。セルフヘルプグループと出会うことの大切さは、わたしは独りじゃないという孤立する不幸福感を解消することや、働かなくても食べていい、障がいのあることは恥ずかしいことじゃないという、伝統的な価値観からの解き放ちや、自己決定と自己実現で社会変革をするという意識覚醒のこの3つで、このことを念頭においてセルフヘルプグループは活動しておられます。このようなすばらしい活動をされていることで、悩みをもった人達が救われていくので、ひょうごセルフヘルプ支援センターの活動を世間に広めていくことの重要性を感じました。

2011年夏の納涼会

料亭「菊乃井」の京料理

牛田 三千子



例年8月は、例会は夏休みとなりますが、代わりに花火や川床で、夏の風物詩を楽しむのが恒例です。今年は8月22日、京都Ⅰクラブ主催の「老舗料亭 菊乃井 夏の京料理の会」に参加させていただきました。

「菊乃井」のご主人のお母様（村田様）が、京都Ⅰクラブのメンバーでいらっしゃるご縁で、特別にリーズナブルなお値段で美味しいお料理を堪能させていただいた上、村田様の軽妙洒落なお話も伺い、本当に楽しい夏の日でした。

季節感を何より大切にされた「菊乃井」のお料理の一椀一皿に感嘆の声を上げ、舌と目で夏を感じつついただきました。丸ごといただける小鮎の塩焼きや最後の宇治しぐれの爽やかさは忘れられません。

その昔、隣接する高台寺に住まわれていた北の政所（ねね）が、茶の湯に用いられたという「菊水の井戸」。その水を大切に守られ、その水を使って京料理を作られる「菊乃井」のご主人。そのお料理やおもてなしの中に、長年にわたり京都の四季を慈しんでこられた心が伝わります。

残暑厳しい日でしたが、しばし非日常のひとときを「菊乃井」で過ごすことができ、心身のリフレッシュができたような気がします。本当にありがとうございました。

南紀白浜と熊野古道の旅

田中 茂美



2011年秋期の移動例会として「南紀白浜と熊野古道の旅」を10月9日・10日の1泊2日で実施いたしましたのでご報告いたします。

例年、親睦旅行を催していますが2011年は移動例会として9名が参加いたしました。おりしも予定地は、9月に台風12号により大災害を受け紀伊半島は交通網や生活ラインが絶たれ、復旧がままならない状態でした。大雨による河川の氾濫や土石流によるダム湖の出現により観光とはかけ離れた状況でした。熊野古道に入る国道も閉鎖されておりましたが、幸運なことに私達が白浜に着く2日前に一部解除され、熊野本宮大社も参道の水も引き何とか参詣可能となった為、駄目モトのつもりで行きました。

10月9日の正午に白浜駅に集合し、「幸寿司」で地場産の名産魚を使った寿司を昼食として熊野古道に出発しました。中辺路コース（白浜～熊野本宮大社）で国道312号を通り発心門王子・滝尻王子～3kmの古道散策を経て熊野本宮大社参詣のコースとしました。明光タクシーさんに案内をお願いしたのですが、熊野川の流れ、水の色、風景、山の形の全てが変化しており運転手さんが驚きとも悲鳴とも聞こえる声で「ひどいことになってしもた。これからどうなるんやろ。」と繰り返し言うておられたのが胸にしみました。無論、道は通行止めこそありませんでしたが、行き交う車も人も無く、私たちのみでした。発心門から世界遺産の巡礼道を歩きました。所どころ山崩れの痕跡がありましたが古道は全く無傷で深い杉木立の間から僅かに陽の光が入ってきます。「道しるべ」として滝尻王子などの石碑（遺跡）が今も活躍しています。尾根から見下ろす里の集落のたたずまいはゆったりとのどかで疲れが取れます。再びタクシーにて熊野本宮大社に行きましたところ、周辺に人の気配も少なく、土産物店の並びも水害により閉鎖のままで、参道の階段を踏みしめ昇るたびに私たちの強運を実感しました。皆それぞれに頭を垂れ神に感謝の念を伝え、日ごろの思いを祈願して宿泊地に戻りました。

宿泊はエクシブアネックス白浜としました。南紀の豊かな恵みを夕食とし、部屋のベランダから絶景を眺め、温泉を満喫して就寝しました。

翌10日は午前中にアドベンチャーワールドに行き、久々のイルカショー・動物園めぐり・待望のパンダ苑見学をしました。パンダが8頭も居り、それぞれに物怖じ無く活動的に見物客を存分に楽しませてくれました。頼もしいパンダ一家と動物達に元気を頂戴しました。昼食にはホテル川久のイタリアンコースを頂き参加者一同、過食気味のお腹をさすりながら慌しくも実り多い1泊2日の行程を終え、帰途につきました。

参加者称略：牛田・笹岡・内藤・中塚・幡山・宮本・久岡・芳川・田中

追：夕食の折、例会として4議題の協議をしました。



ジョルジュ・サンドと私

坂本 千代



50代も後半に入り、今までの生活を振り返ってみると、家族を除けば、私の人生の道筋に大きな影響を与えた人物はジョルジュ・サンドだとわかります。小学生の時に彼女の『愛の妖精』を初めて手にし、そこに描かれた19世紀初頭のフランスの田園の恋物語に魅了されました。その後の思春期に現実生活の圧迫が強くなればなるほど、私はサンドをはじめとする文学作品やマンガのフィクションの世界に逃れて、あやうい精神のバランスをとっていたように思います。

大学に入ってかなり解放感を感じましたが、体に染みついたある種の圧迫感から逃れることはできず、いつも「何かしなくちゃ、何かしなくちゃ」と追い立てられているような気がしたものです。結局私は文学部の仏文科に進学、卒業論文もサンド（『歌姫コンシュエロ』）を選びました。卒業後の進路は何も思い浮かばなかった（あまり働くつもりがなく、本を読んでいたかった）ので、親のすねをかじってフランスのリヨン大学に留学。その時は、卒論のためにさんざん読んだサンドにあきあきしていて誰か他の作家を研究したいと思っていました。

さて、胸を膨らませて渡仏した夏が過ぎ、秋に本格的な大学の授業が始まってフランス語で悪戦苦闘するうち、あたりが寒々とした灰色の晩秋を経て身を切るような冬の寒さになると、異郷の生活のわびしさが耐えがたくなってきました。なかなか友人もできず、勉強もはかどらず、学生寮の部屋に閉じこもっている頃、読んだのは結局サンドの作品でした。これで、私は彼女から一生離れられないと覚悟を決めました。

大学の教員になってからは、もちろんサンドだけをやっているわけにはいかず、研究領域を広げる努力をしましたが、それでもサンド作品の研究は最重要事項です。国内外のサンド関係の研究会、学会、シンポジウムなどに出ることが多く、そこで知り合った人たちとの輪が大きくなっています。勉強会を開いたり、共同で本を出したり、いっしょに旅行したりして親しい仲間も増えました。サンドという共通の関心事があるので、話題がつきるといえることはありません。

ところで、ゾンタの活動は「女性の地位向上」という明確な目的があり、それはまさに19世紀フランスでサンドが考え実践しようとしたこととも重なります。体力・気力が続くかぎり、ゾンタの仲間と同じ目標に向かって楽しく歩いていきたいと思う今日この頃です。



ジョルジュ・サンド (1804~1876)

荻野 恵美子



皆さん、初めまして。この度、新会員となりました、荻野恵美子です。司会やナレーターとして仕事をさせて頂く他、イベントや番組制作などのプランニングもしています。小さなタレントプロダクションを運営し、アナウンサーや講師・ミュージシャンの派遣も行っております。また、パラリンピックの選手、ハンディキャップを持ったアスリートのサポート事業、ユニバーサル事業も行っています。まだまだ過酷な境遇で生きるスポーツ選手や経済的な支援が必要な人たちのサポートをしていますので、是非皆さんもご協力お願い致します。

小さな子ども達や子育て中のお母さんに心豊かにできる日本の神話などの朗読を通じて、元気になって頂けたら嬉しいとも思って、女性向けの活動もしています。一人の働く女性として、子どもを持つ母として、誰かの役に立つ活動に協力できたら光栄です。

どうぞ宜しくお願いいたします。

岡田 千佳子



この度大阪Ⅱゾンタクラブに入会させていただいた岡田千佳子と申します。夫と一緒に、天王寺駅前で透析クリニックを開設して、2011年で17年になります。結婚後、長女が3歳の時に大阪医科大学に入学し、医学部2年生の夏休みに次女を出産しました。子育てしながら勉強、子育てしながら仕事と忙しい毎日をおくり、子供達には寂しい思いをさせてきました。その長女も、武蔵野美術大学日本画学科を卒業後、イラストレーターになり、結婚後も自宅で仕事を続けています。次女は、大阪歯科大学に在学中で、来年国家試験を受けます。



自分のことで手一杯だった私がボランティアのことを考え始めたのは、2011年3月11日の東日本の大地震がきっかけです。被害の報道に心が痛み、私に出来ることはないかと考え、震災孤児の奨学資金に僅かながら協力することにしました。さらに、子育てが一段落したこともあり、チャイルドスポンサーシップに参加することにもしました。現在タイとベトナムの子供達4人の応援をしています。男女2人ずつ、まだ小さな子供達です。時々届く手紙と写真は可愛く、いつか実際に会いたいと思っています。どこの国の子供達の「親」になるかはこちらで選択できましたが、タイとベトナムを選んだ理由は2つあります。まずは比較的近い国であることと、もう1つの理由はゴルフ場があることです。ゴルフを楽しんで、子供達にも会える、そんな旅行をするのが夢です。

体を動かすのが好きな私は、今、社交ダンスを夫と習っています。写真は、一昨年のクリスマスダンスパーティーで2人でワルツを踊ったときのものです。

まだまだ拙いワルツですが、楽しんで踊っているのが伝わるかと思い、恥ずかしいですが皆様に見ていただくことにしました。

これからも、よろしくお願い致します。

編集後記

広報誌がパソコン編集になって数年経ちますが、初めてその編集に携わり四苦八苦しました。会員から寄せられた貴重な原稿を次の活動につなげるよう、大事な橋渡しの一翼を担うことができれば、こんなに嬉しいことはありません。今後とも会員のみなさまのご協力をよろしくおねがいいたします。

辻 康子